

簡齋文庫本『韓非子翼蠹』と太田方

— 書誌学的分析から、近世における書籍製作の特性に及ぶ —

木 島 史 雄

目次

I. 緒論	2
1. はじめに	2
2. 『韓非子』とその注釈	2
3. 『韓非子翼蠹』	3
II. 残存本の確認	4
1. 木活字本	4
2. 鈔本	7
3. 景印本	9
4. 排印本	9
5. 電子本	9
6. 残存本の注目点	10
• 木活字本の校閲終了記事	10
• 木活字本への欄外書入れ	10
• 鈔本の2類型（木活字本との関係）	13
III. 重訂版の可能性と簡齋文庫本の位置づけ	15
1. 継続的改訂宣言	15
2. 『重訂韓非子翼蠹』	15
3. 木活字本をめぐる学術的批評交流	16
IV. 豊橋図書館所蔵簡齋文庫本の紹介	20
1. 書誌データ	20
2. 永山近彰の「書後」	22
3. 簡齋文庫本の位置づけと課題	23

V. 近世における著述・書籍の製作について	24
1. 鈔本時代の著述	24
2. 同学批正を活かした研究手法の新機軸とその齟齬	25
VI. 結論	26
VII. 関係資料	26
1. 太田全齋関係資料	26
2. 韓非子翼蠹関係	27

I. 緒論

1. はじめに

本稿の目的は、以下の2点を解明・記述することにある。

- 改訂版『韓非子翼蠹』の発見とその意義
- 江戸時代学術著作の製作と太田全齋の木活字本の試み

以上の二点へのアプローチは、愛知大学豊橋図書館簡齋文庫¹に収蔵される1帙8冊20巻の『韓非子翼蠹』鈔本に接したことに端緒を持つ。簡齋文庫は、元住友本社総理事・蔵相小倉正恒（簡齋）氏所蔵の漢籍等約30,000冊を受贈したもので、刊本もさることながら、鈔本の稀書に富む。本稿で取り上げる『韓非子翼蠹』もその一つである。『韓非子翼蠹』と題される書籍は、富山房の漢文大系にも収められて広く普及しているが、詳細に検討してみると、漢文大系本ならびにその元になった木活字本は、この書の最善本ではないことが明らかになる。簡齋文庫本が、漢文大系本≒木活字本に比してどのような点で優れるのかを明らかにすることが本稿の趣意の一つである。さらに、この考察を進めてゆく中で、『韓非子翼蠹』になぜ木活字という当時稀な刊行手法が用いられたのかという疑問も生じてきた。この問題を考えることで、江戸後期という時代に学術著作がどのように作成・刊行されたのか、聊かの知見が得られる。電子著作盛行の現代はもとより、学術雑誌と活字印刷によって成果が蓄積されていた少し前の学術形態ともそれは異なっている。現代学術にとっての「当たり前」もしくは「少し前のあたりまえ」が、如何に偶発的な環境であるのかも明らかになるであろう。

2. 『韓非子』とその注釈

『韓非子』は中国戦国時代末期の法家思想家・韓非が著わした書物である。『史記』韓非伝には「孤憤・五蠹・内外儲説・説林・説難の十余万言を作る」と記されており、司馬遷のころには、書名こそ付けられていないものの、ほぼ現在の文字塊が成立していたと考えられる。

その後『漢書』芸文志では「韓子 五十五卷」と記され、『隋書』経籍志で20巻となって以後、ほぼこの巻数が踏襲される。法家思想の代表的書物として権力者・治世者たちに重用されてきたが、伝統中国における建前上のイデオロギーである儒家と相容れないところがあり、表面的には長く等閑視された。そのため儒家の書物が過剰なほどの注釈・研究書に恵まれたのに対し、十分な扱いを受けてこなかった。中国では、宋本にさかのぼる原文²は残るものの、語彙・言葉の出典や音韻、用例などを精査した、読解のための学術的研究注釈の出現は、清朝後半を待たねばならなかった。ところが日本では、荻生徂徠の『読韓非子』³以降、陸続として研究がすすめられ、全編に注釈したものだけでも幕末までに数種が完成した。⁴その一つが太田方（全齋 1759-1829）の『韓非子翼叢』である。

3. 『韓非子翼叢』

本稿で取り上げる太田方（全齋）著『韓非子翼叢』が、斯界で注目される事由は大きく以下の2点である。

一つは、その内容の優秀さである。『韓非子』注釈のなかで、この書は、原典の閲読に最も適切な示唆を含むものとして利用されてきた。現代日本語訳本の著者たちがもれなくその名を挙げるのは、その恩恵を被ること大であったからである。また韓非子の本国、中国に先立って日本でこのような成果が出たことは特筆に値する。江戸期の漢学研究が、中国での研究に時期的に先行し、現在の文献学の評価に耐えうるレベルに到達した成果として、太宰春台の『古文孝経孔氏伝』、山井鼎の『七経孟子考文』とともにあげられることが多い。

今一つの事由は、『韓非子翼叢』が、活字印刷によって、しかも著者本人によって刊行された点である。日本の活字印刷は、江戸初期に所謂「古活字版」が出たが、間もなく途絶え、もっぱら版面全体を一枚の版木に彫る整版に移行した⁵。その後、江戸後期になっていくらか活字版での刊行も見られるようになる⁶。完成稿であり、大部数を印刷・刊行するのであれば、整版が勝る。返り点・送り仮名などにかかる作業量も合わせて考えれば、活字版の非効率性は明らかである。そんな状況の中で、太田方がこの手法を採用し、しかも個人で組版・刊行したのは、きわめて異例である。従来、活字本であること、個人組版であること、少数印刷であることに注目が集まり、景印本が刊行され、その出版の辛苦は、小説にもなっている。⁷

ところで刊行の次第について「韓非子翼叢」跋文は以下のように記す。

曩者城北巢鴨之衢。直突之災。咫尺藩邸。積年精力殆將烏有焉。今茲購得活版刷二十部。未定之述。宜緘篋筥。特懼一曙離于池魚。而無副本修舊業也。因刷以自備。豈公諸世棒哉。
曩さきに城北巢鴨の衢に直突の災あり。藩邸に咫尺す。積年の精力、殆んど將に烏有たらん

とす焉。今茲に活版を購得し二十部を刷す。未定の述なれば。宜しく篋笥に緘すべきも、特だ一曙に池魚に離り⁸、而して副本の舊業を修する無きを懼るるなり。因りて刷りて以つて自らに備ふ。豈に諸を世に公にせん哉。

要は、近火体験をもとに、蓄積した研究成果が失われることを恐れて、副本を作る。また世間に公開することが目的ではなく作業を継続するための自分用であるという。しかしこれだけでは、木活字印刷という特殊な手法を採用したことの十分な説明とは言えない。副本を欲するだけならば、筆抄によればよいし、改訂を目指すのであれば手元の稿本に書き込みをすればよい。この跋文の記事は、木活字採用の、真に必然の事由を語っていないように思われる。従来『韓非子翼蠹』解説も、全齋の言を辿るばかりで、そのやむを得ない事情を説いていない。本稿では、この問題について一つの試案を提示したいと思う。

II. 残存本の確認

上述のように『韓非子翼蠹』は著名であり、景印本、排印本もあって、現在その入手に困難はない。しかし残存する諸本を検討してみると、事が単純でないことが判明する。そこで本章では、本論文筆者が知り得た限りにおいて、残存する諸本について記述する。現時点での収蔵状況を記録することも、書誌学的に、重要であると考えているからである。

現在、『韓非子翼蠹』は、5つの様態で存在する。1. 木活字本、2. 鈔本、3. 景印本、4. 排印本、5. 電子本である。そして最後に、この残存本総ざらえから見えてくる注目点を確認しておこう。

1. 木活字本

漢籍データベース⁹、日本古典籍総合データベース¹⁰ および個別図書館の目録や OPAC などによれば、木活字本の所蔵は、

- a. 一般社団法人義倉／b. 国立国会図書館／c. 慶應義塾大学／d. 財団法人正宗文庫／e. 静嘉堂文庫／f. 尊経閣文庫／g. 天理大学附属天理図書館／h. 東京都立中央図書館(加賀文庫)／i. 東京都立中央図書館(諸橋文庫)／j. 内閣文庫／k. 福山誠之館同窓会／l. 無窮会(平沼文庫)／m. 無窮会(神習文庫)／n. 雄松堂景印底本／o. 早稲田大学

と15にのぼる。¹¹長澤規矩也が指摘する¹²ように、跋文が記す総印刷数20に対して残存部数が多すぎるようにも見える。¹³またこのうち幾点かには、後述のように全齋自筆書入れがある。

a. 一般社団法人義倉¹⁴

一般社団法人義倉に所蔵を確認済み。『音図口義・全齋読例』¹⁵ 巻頭の解説に、「韓非子翼蟲跋」の版面写真が載せられており、その中に「文化五年閏六月八日校閲畢」との校閲完了書入れが見える。

b. 慶應義塾図書館

20 巻首 1 巻 太田全齋撰／文化 5 年刊（1808） 木活字／自筆書入本／26.0 × 18.1cm 21 冊／110X@610@21（以上、『慶應義塾図書館和漢貴重書目録』134 ページ）¹⁶

c. 国立国会図書館

巻 5-20 太田方 述 江戸：太田方 [ほか] 出版年月日等：[文化 5 (1808)] 8 冊；26.8 × 18.0cm 注記：木活字版 四周単辺 有界 每半葉 9 行 20 字 小字双行 版心「韓非子翼蟲（巻数）（丁数）全齋活版」単魚尾 書名は巻頭による 巻末、版心、題簽も同じ 巻 10 の巻頭書名は「韓非翼蟲」各冊題簽に「三（～十）」と墨書あり 刊語の末に「享和元年 江戸藩邸私館福山太田方題 / 太田方撰 / 男周彫 / 男信助彫 / 男三平刷」とあり 印記：正齋、一貫亭、正齋、義學主人。（以上、国会図書館オンラインによる）

国立国会図書館デジタルアーカイブで版面画像が公開されている。¹⁷ また印記により、近藤重蔵（正齋）の旧蔵であることが知られる。

d. 財団法人正宗文庫

太田全齋著 一一冊 装幀：和 大小：大 刊写年月日：天保十四年刊 書写刊行者：空白 番：別函 号：06 備考：[仮番 18.] (正宗文庫目録(五十音順、典籍編) Yamamoto, H. (2009). 『調査研究報告』(大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 調査収集事業部 (29) 269 ページ)。また平成 15 年 10 月 14 日採取の正宗文庫書目カード(国文学研究資料館)によれば、「整理番号 6 - 18 丁数 61026.7 × 18.0 帙入り 保存状態：良」となっている。

e. 静嘉堂文庫

二〇巻首一巻／太田方撰 文化五刊（木活） 一一冊 一〇五函 四二架（以上、『静嘉堂文庫漢籍分類目録』449 ページ）

静嘉堂文庫は、木活字本と鈔本の両種を所蔵。

f. 天理大学附属天理図書館

二十卷存十六卷 太田全齋著／〔享和元〕刊（江戸 太田全齋）八冊／一八七〕～四周単
辺 有界九行二十字小双行／～木活字版 卷一～卷四を欠く 太田全齋自筆の校正書入あり
識語（第八冊末）全齋筆「文化五年閏六月廿二日校閲畢」 印記「松山文庫」「竹清藏」
一ニ八・八－イー」（以上、『天理図書館期初目録和漢書之部 第四』108 ページ。）

天理図書館は木活字本と鈔本の両種を所蔵。¹⁸

g. 内閣文庫

（木活字本）二〇巻、史記韓非伝・韓非子附録翼蠹各一卷 太田方（全齋）写 昌平坂学問
所旧蔵 10 冊 191 函 311 号（『内閣文庫国書分類目録』1136 ページ）

h. 福山誠之館同窓会

福山誠之館（広島県立福山誠之館高等学校）同窓会に所蔵を確認済み。「誠之館」という名
称は、福山藩の藩校にその起源をもつ。

i. 無窮会（平沼文庫）

（平沼文庫蔵書目録による）

j. 雄松堂景印底本

影印本には底本の所蔵者についての記述がない。川瀬一馬解説では「今回、翼蠹の原本をあら
たに見出したのを機会にこれを覆印されることになった。」と記すのみで、原本の所在は
不明である。また第八冊（最終冊）末に「文化六年閏六月廿二日校閲畢」との識語がある。
この識語が極めて奇怪であることについては後述する。識語筆跡に関しては、義倉本が謹厳
な楷書であるのに対し、雄松堂本は筆速のはやい行・草書である。

k. 早稲田大学

巻首、第 1-20 / 太田方 述 著者：太田 全齋、1759-1829、出版者〔出版地不明〕：〔出版者
不明〕、出版年：享和元〔1801〕 跋、形態：11 冊；27cm。注記：柱刻：全齋活版、朱書入
あり 巻第 1-2 は補写。虫損あり はり込あり。和装。印記：「福山東田邊氏圖書記」、「福山江
木氏之章」、「苟完樓藏書印」蔵書印あり。附：史記韓非伝。（以上、早稲田大学 OPAC）¹⁹

2. 鈔本

漢籍データベース、日本古典籍総合データベースおよび個別図書館の目録や OPAC などによれば、鈔本の所蔵は、

- a. 愛知大学簡齋文庫 / b. 大阪大学総合図書館 / c. 京都大学文学研究科 / d. 国立国会図書館 / e. 静嘉堂文庫（竹添井々舊蔵本） / f. 尊經閣文庫 / g. 天理大学附属天理図書館 / h. 東京大学総合図書館 1 / i. 東京大学総合図書館 2 / j. 東京都立中央図書館（加賀文庫） / k. 東京都立中央図書館（諸橋文庫） / l. 内閣文庫 / m. 無窮会（神習文庫） / n. 無窮会（平沼文庫）

の 12 機関 14 本である。

a. 愛知大学簡齋文庫

後章で詳しく検討する。

b. 大阪大学総合図書館

20 卷附 1 卷 / 太田方述 [書写地不明] : [書写者不明] [書写年不明] 6 冊 ; 26.4 × 19.0cm
写本 印記 : 「關藤文庫之印」²⁰、「百二氏藏書」朱書あり 序、附篇 / 卷第 1-2 / 卷第 3-4 / 卷第 5-6 / 卷第 7-8 / 卷第 9-10 / 卷第 11-12 / 卷第 13-14 / 卷第 15-16 / 卷第 17-18 / 卷第 19-20（大阪大学 OPAC による）。

c. 京都大学文学研究科図書室

20 卷附 1 卷 / 太田方述訓点付四周単辺無界 9 行 20 字注文双行 [書写地不明] [書写者不明]
訓点付。印記 : 「津輕 / 家藏」ほか 1 印（京都大学 OPAC）

狩野直喜の旧蔵書を記す『君山先生蔵書目録』（昭和 28 年京都大学人文科学研究所）には「韓非子翼龜 二十卷附篇一卷 太田方撰 鈔本 十一冊」が著録されており、昭和 27 年に文学部へ転換寄託されたという。原本を閲覧したが、本文欄外に「直喜案・・・」との書き入れが見られ、この本が狩野直喜旧蔵本であることは間違いない。字体は極めて丁寧な精鈔本であり、校訂のための作業本ではなく、ある時点での完成本と言えるものである。欄外上部に間々書き込みがあり、活字本との校讎の場合もあり、意味を踏まえた改字の指示もある。その書きぶりや字体は多様で、随時書き込まれたものである。²¹ 全篇にわたって返り点が、一部に送り仮名が記される。簡齋文庫本との関係は、後述する。

d. 国立国会図書館

巻7-8、9-10 / 著者：太田全齋 / 出版事項：写 / 大きさ、容量等：4冊（合2冊）；27cm / 注記：装丁：和装 マイクロフィルムあり。(NDLONLINEによる)

e. 静嘉堂文庫（竹添井々舊藏本）

二〇巻 / 太田方撰 寫 四冊 四五函 二六架 竹（竹添井井旧蔵）（『静嘉堂文庫漢籍分類目録』449ページ）

f. 尊經閣文庫

二〇巻 附録一卷 太田方撰 寫 八 四二八（『尊經閣文庫国書分類目録』315ページ）

g. 天理大学附属天理図書館

「写 二十巻付一卷 太田方（太田全齋）著 / 享和元（一八〇一）自筆 十一冊 / 一四七」9行18字注 奥書「享和元年八月四日操筆六日畢」（第一冊末）、「享和元年二月廿五日始業八月六日 / 終業八月六 百五十九日」（巻二十尾題下）「第十一冊末に「大隈重信侯伝編纂會」（青刷）罫紙に記した木活字版の 跋文及び刊語を合綴。」（以上、『天理図書館期初目録和漢書之部 第五』47ページ）

h. 東京大学総合図書館 1

鈔本10冊、底本：文化5年跋活版、印記：「南葵文庫」、書誌ID2003190207（東京大学OPAC）

i. 東京大学総合図書館 2²²

鈔本6冊、底本：文化5年跋活版、印記：「南葵文庫」、朱筆書き入れあり、書誌ID 2003192779（東京大学OPAC）

j. 東京都立中央図書館（加賀文庫）

16巻 太田方著 写 6冊 大 巻1、2、9、10欠（以上、東京都立中央図書館蔵 加賀文庫目録 補訂版 昭和55年補訂37ページ）

k. 東京都立中央図書館（諸橋文庫）

20巻 128-MW-2 太田方（全齋）著 / 写 天明3（1783）自序 / 11冊（1帙）大 / 附：目

録 史記韓非伝（以上、東京都立日比谷図書館蔵 諸橋文庫目録 75 ページ）

l. 内閣文庫

内閣文庫和書／〔請求番号〕191 - 0311〔保存場所〕本館〔人名〕著者：太田全斎〔数量〕10冊〔書誌事項〕写本〔旧蔵者〕昌平坂学問所（国立公文書館デジタルアーカイブによる。また同ページより全版面ダウンロード可。）²³

m. 無窮会（神習文庫）

二十卷 太田方 寫 八 八六〇三（以上、『神習文庫図書目録』271 ページ）

n. 無窮会（平沼文庫）

二十卷 太田方 寫 11冊（以上、『平沼文庫蔵書目録第一輯』71 ページ）

以上の鈔本14本は、詳細に検討してみると、2類に分けることができる。それについては後述するが、簡述すれば、第1類は木活字本の写しであり、第2類は太田方の手になる木活字本刊行後の継続著作とおもわれるものである。

3. 景印本

雄松堂版 昭和四十七年（1972年）東京・雄松堂書店

これは雄松堂書店が木活字本を100部のみの限定版として景印したもので、和紙袋綴11冊2帙入で川瀬一馬の別冊解説がつく。上述のように、誠に遺憾ながら、この本では、影印原本のデータが全く欠けており、書誌学上、学術的な資料として安心して利用することができない。また何故か国立国会図書館には所蔵されていない。

4. 排印本

漢文大系本 第8巻 富山房編集部編。（服部宇之吉校訂明治44年）

これには、改訂版（昭和48年）があり、長澤規矩也の解題補訂が付されている。

5. 電子本

2020年8月現在、国会図書館所蔵木活字本と内閣文庫所蔵鈔本の版面画像がインターネットで公開されている。

- ・国会図書館所蔵木活字本

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2605238>

- ・内閣文庫所蔵鈔本

<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F100000000000034787>

6. 残存本の注目点

前章で残存する木活字本、鈔本、計 29 点のデータを確認したが、そこで見えてきたいいくつかの注目点を検討してみよう。

- ・木活字本の校閲終了記事

上に掲げた木活字本系のもののうち、少なくとも 4 本には、全巻末に校閲終了記事がある。

- a. 義倉本： 「文化五年閏六月八日校閲畢」
- f. 天理図書館本： 「文化五年閏六月廿二日校閲畢」
- j. 景印底本： 「文化六年閏六月廿二日校閲畢」
3. 排印漢文大系本： 「文化五年閏六月二十二日校閲畢」

これらの書入れの前には「戊辰（文化 5 年）孟夏乃卒業矣」と活字印刷されている。ここに言う「卒業」は、文脈から印刷のことを指すと思われ、製本などを進め、孟夏（4 月）から月余で校閲の段階となったものであろう。

ところで上述したように、雄松堂景印底本の書入れは、奇怪である。何となれば、文化 6 年には閏 6 月が存在しないからである。また一年を隔てて天理図書館本と同月同日というのは偶然であろうか。リアルタイムで文化 6 年に暮らす人間が、閏月の存否を間違うものか、極めて訝しく感じられる。また書体の相違も、不審を一層募らせる。景印底本の所蔵・所在も含めて、さらなる究明が求められよう。

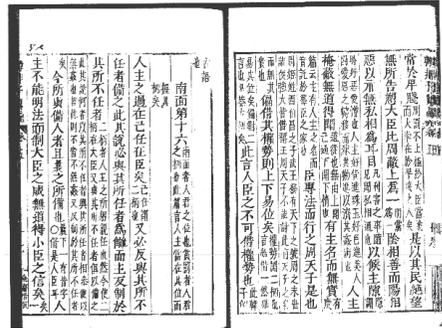
なお排印漢文大系本と天理図書館本の日付は実質上同一である。「廿」と「二十」の表記のずれは、活字化に当たって生じたものかもしれない。また同一日に仕事が完了した可能性も否定できないが、単純に見れば、漢文大系本の底本は天理図書館本ということになるだろう。

- ・木活字本への欄外書入れ

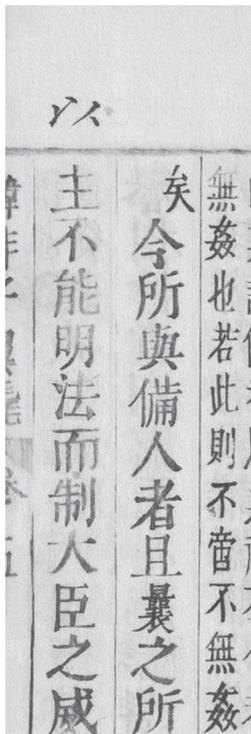
全巻末の校閲終了記事以外にも木活字本には間々書入れが見られる。その大半は欄外上部への校勘書き込みである。ここで特徴的なのは、同じ場所への校正記事が、全く同じスタイルで行われているという点である。版面写真を利用できる国会図書館本と影印本で比較する。



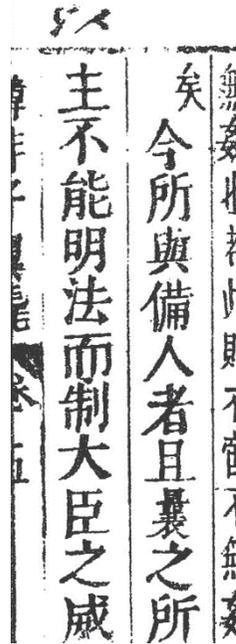
木活字本（国会図書館）1



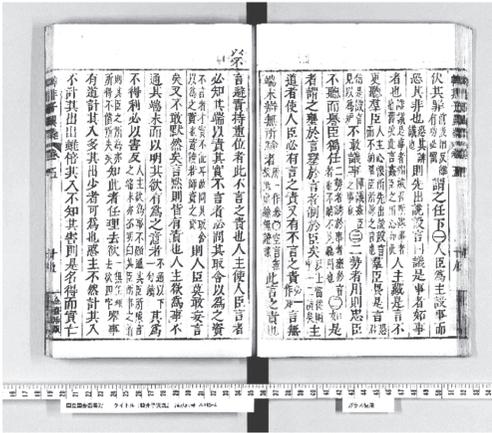
木活字本（雄松堂版）1



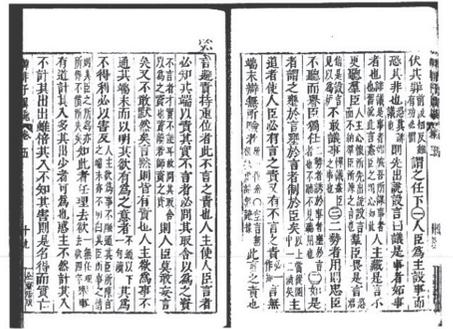
木活字本（国会図書館）2



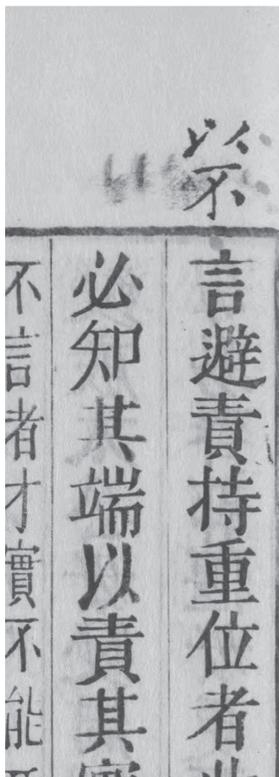
木活字本（雄松堂版）2



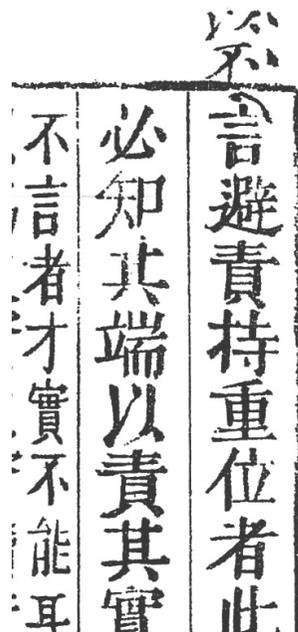
木活字本（国会図書館版）3



木活字本（雄松堂版）3



木活字本（国会図書館版）4



木活字本（雄松堂版）4

以上の写真から明らかなように、書き込みの方式（挿入されるべき場所に点を打ち、上部欄外に挿入すべき文字を記して右わきに点を打つ）の点でも、書き癖（「不」字の2画目と3画目の交わり具合とバランス）の点でも、この2つの校勘書き込みが、同一人物によってなされたことは明らかである。これらは、同一人物が同一個所に同一の書きぶりで校正指示をしたものであり、版面を読み進めていく中で偶発的に見つけた誤植にたいして修正を指示したというようなものではない。とすればこのような誤植訂正は、印刷終了後に版元＝全齋自身による訂正であると考えるのが妥当であろう。このような校正作業が、a. 義倉本に関しては「文化五年閏六月八日」に、f. 天理図書館本に関しては「文化五年閏六月廿二日」に完了したのである。

・鈔本の2類型（木活字本との関係）

技術発達のおかげで諸版本の比較が容易になってきた。『韓非子翼蟲』に関して言えば、

- ・木活字本2本、
 - ・国会図書館本（インターネット公開。但し巻1－4を欠く）
 - ・景印本（写真製版）、
- ・鈔本2本、
 - ・内閣文庫本（インターネット公開）
 - ・簡齋文庫本（近日公開予定）

を自宅机上で見ることができる。さらに幸いにもこの4本は異なる特性を代表するものであり、各本の特徴を確認することができる。先づ注目するのはこの4本の行格である。木活字本は、毎半葉9行20字であるのに対し、鈔本のうち、内閣文庫本は木活字本と同一、簡齋文庫本は毎半葉10行、行18字である。すなわち木活字印刷か写抄かという違いはあるものの、内閣文庫鈔本は、版面の文字並びレイアウトは、木活字本と基本的に同一である。これをどのように考えればよいであろうか。二つの可能性があろう。1つは内閣文庫本が木活字本作成のための最終原稿である可能性であり、今一つは内閣文庫本が木活字本を引き写して作成された可能性である。しかし版面の詳細な検討の結果、後者であることが明らかになった。巻11第12葉オモテ第一行を見てみると、国会図書館本には上部欄外に「以」字を補うようにとの指示がある。（図版参照）一方、内閣文庫鈔本には上部欄外の校正指示がないものの、本文に「以」字を無理やり挿入することで訂正を行っている。図版第1行ではその窮屈な挿入ぶりを確認できる。木活字本の版面レイアウトを維持する意図が無ければ、単に文字を一字ずつ繰り下げればよい。しかしここでそのように処理されていないのは、筆鈔の際のミス回避するために、原本＝木活字本のレイアウトの維持を強く意識したためであろう。これ

以
 說之養之以五乘之奉
 故歸而不食荀子禮

木活字本（国会図書館）

說之養之以五乘之奉
 故歸而不食荀子禮論篇
 注古者十里為成
 有采地者得立三廟也
 可見五乘之奉之厚矣
 王
 猴客曰猴文選八字藝文類
 必半歲不入宮不飲酒食

内閣文庫鈔本

之治人謂王曰計無度量言談之士多棘刺之說也
 章句無類也計無以下作去者而此向出後一日
 一曰好微巧衛人曰能以棘刺之端為母猴好一
 好字下曰作有文類也德王無巧術入請以棘
 有臣燕王說之說養之以五乘之奉養房用及運
 能事不與焉故歸而不食荀子禮論篇有五乘之
 者事三世注古者十里為成十里為成十里為成
 地謂大有采地者得采之廟也出采地之傳養巧
 人王曰吾試觀客為棘刺之猴猴作請試客曰運
 養文類也客作巧人主人主欲觀之必半歲不入宮
 不飲酒食肉雨霽日出視之晏陰之間宿雞雞及
 十一
 十三

簡齋文庫鈔本

によって両者の先後関係は、木活字本が先行し、その校勘記を筆写の際に反映させたのが内閣文庫本であることが明らかになった。このような鈔本は他にも存在する。東京大学総合図書館が所蔵する鈔本2点は、いずれも行格が木活字本と同様であり、木活字本を筆写したものである。未見の鈔本の多くも、この仕組みで創出されたものであろう。いっぽう簡齋文庫本はどうであろうか。該当する文字列の場所を開いてみると、「養之以五乘」と無理なく文字が収まっている。ということは、簡齋文庫本は、木活字本の誤植以前の稿本か、誤植の存在を把握したうえで作成された本であるかのいずれかということになる。この問題についても、以下の版面検討により、後者であることが明らかである。すなわち、木活字本で巻5第3葉ウラの「恃交援而簡近隣」への注「淵鑑類函亡微簡上有而字○無備而易敵」のうち○までの12字に朱で抹消記号が付されている。この部分、簡齋文庫本では抹消済みとなっている。もし簡齋文庫本が木活字本に先立つものであるならば、木活字本にもこの文字塊は見られないはずである。木活字本制作後に抹消が指示され、簡齋文庫本では抹消されたと考えるのが妥当であろう。したがって簡齋文庫本は木活字本に遅れるものであると判断される。

先に記したように、『韓非子翼蠹』鈔本は、2類に分けられる。第1類は木活字本の写しであり、第2類は木活字版後に太田方によって作成された継続著作である。管見の限りにおいて、第1類に当たるのは、東京大学の2本と、内閣文庫本である。いっぽう第2類に当たることが確実なのは、京都大学本と簡齋文庫本である。

III. 重訂版の可能性と簡齋文庫本の位置づけ

1. 継続的改訂宣言

木活字本に跋文が付されていることは上述した。その文章の中で繰り返し語られるのは、

- 検討途中の暫定成果物で継続的改訂を行うこと
- 世間への公開の意図がないこと

の2点であった。この点を、別の資料で補強しておこう。なお跋文には幸いにも土屋紀義氏の「韓非子翼龜跋文国訳嘗試」という詳細な訳注も存在し、大いに示唆を受ける。²⁴

2. 『重訂韓非子翼龜』

前項でふれたように、全齋は跋文で完成稿でないと記していた。とすれば、木活字本以後の研究成果を記したものが存在していた可能性が高い。現にそれをうかがわせるデータが存在する。『慶長以来諸家著述目録 漢学家之部』（明治27年（1894）刊）²⁵には太田方の著作として

- 重訂韓非子翼龜_{廿六}

が、『近代著述目録 後編』（天保13年（1842）年原稿）²⁶には、

- 韓非子翼龜活版
- 重訂韓非子翼龜二十六

の2点が記載されている。とりわけ、『近代著述目録 後編』は、「活版」と並べて「重訂」本26巻を別に掲げており、二種類の『韓非子翼龜』が存在したことは間違いない。全齋は文政12年（1829）に卒しているから、没後13年目の時点では重訂本の存在が知られていたことになる。また漢文大系本に付された服部宇之吉の「解題」（明治44年（1911））には、

本書ハ享和元年ノ跋文アリ。後年又更ニ重訂セルモノアリ。

とある。次章で詳しく検討するが、簡齋文庫本につけられた永山近彰の「書増訂韓非子翼龜後」には以下のようにある。

是書全齋畢生精力所注。而此本係暮年増訂、比之刊本、頗有異同、可貴重也。（是の書全齋畢生の精力もて注する所なり。而して此の本 暮年の増訂に係りて、之を刊本に比ぶれば、頗る異同有り、貴重す可きなり。）

この本は全齋晩年の増訂にかかるもので、木活字本と異同があるという。永山近彰はこの本を「増訂韓非子翼龜」と記すが、「増訂」の語は確定した書名というよりも、永山が内容を推して付した名称であろう。あるいは永山は巻数の相違などから、完成版『重訂韓非子翼龜』と名付けるのを嫌って、あえて「増訂」と名付けたのかもしれない。いずれにせよ『慶長以

来諸家著述目録』／『近代著述目録 後編』が記す『重訂韓非子翼蠹』は、簡齋文庫本『韓非子翼蠹』とつながる可能性がある。

3. 木活字本をめぐる学術的批評交流

上記のように『韓非子翼蠹』に重訂版があったことは書目で確認できるのだが、別の2つの側面から、重訂版成立の過程を追うことができる。一つは同学に批評を請うた記録であり、いま一つは木活字本への校正書入れの処理記録である。

『太田全齋書簡集』²⁷に収められた（文化7年）²⁸三月十日付 菅茶山宛書簡に以下のようにある。

○韓子翼蠹ノコト御間暇ノ説ハ御覽被下、無御遠慮御直可披下候。反故二相成候而宜御坐候。偏奉頼候。一體活字ニいたし候ハ火事ヲ恐候而ノ事ニ而考訂誠ニとどき不申候。翼蠹中蒲阪氏ト申候ハ保坂内藏之丞ト申、松平左京大夫様御家來候處、活板いたし候時分ハ一向不存、其後僕宅ヘフト出來ニ而逢申候。今ハ水道町ニ而松澤金三郎ト申御家人ニ被成候。折々出會申候。此人抗直ノ人ニ而遠慮なく翼蠹ヲ塗抹シ被申候。甚辱存候。何卒先生ニも無御遠慮御是正被下度奉頼候。久太郎子江も乍憚被仰頼被下度奉頼候。前ニも申候通翼蠹是ニ而宜上出來ト安心シテ居ルには無之候間、闔棺までは改候心得ニ御座候。無御遠慮眞黒ニ被成可被下候。＜中略＞

○先達而韓子解老篇ニ隔句用韵ニ而進退韵ノ事御尋申候。其後心頭候へハ詩經ニもいくらかも御坐候。老子ニも淮南子ニも素問ニも御坐候。何分ニも無御遠慮御直被下度奉頼候。恐怪謹言。

三月十日

太田 八郎

經（花押）

菅太中様

木活字本の印刷完了が文化五年四月であるから、その一年余り後の書簡である。この書簡の主意は、菅茶山に『韓非子翼蠹』を「御遠慮無く御直し下さるべく候」、つまりは忌憚なく批正・修正をしてほしいということである。いうまでもなく菅茶山は当時もっとも著名な漢学者であり、かつ全齋の郷里・福山近郊の神辺で廉塾を開いていた。富士川英郎の『菅茶山』は二人の交流をつぶさに記している。世間に公刊・市販されていない『韓非子翼蠹』への批正を乞うているのであるから、茶山に『韓非子翼蠹』を贈ったのであろう。²⁹ここで着目すべきは、「考訂誠にとどき申さず候ふ」「何卒先生にも御遠慮無く御是正下されたく頼み奉り候ふ」「上出來と安心して居るにはこれ無く候ふ間、闔棺までは改め候ふ心得に御座候ふ。御遠慮無く眞黒に成され下さるべく候ふ」といった表現である。すなわち改訂を死ぬまで続

ける決意表明と、改訂のために茶山の意見を乞う姿勢である。実際に茶山がどのように対応したのかは明らかではないが、贈られた『韓非子翼蠹』に書き込みをすることもあったであろう。最終的には第幾巻・第幾葉・第幾行といった形で場所を指定し意見を書き送ったかもしれない。ただその前段階には必ずや送られた『韓非子翼蠹』木活字本に書入れをしたり付箋を貼ったりして作業を行ったに違いない。先にみたように、現存『韓非子翼蠹』木活字本の中には、書き込みの見られるものがある。しかも、文字の書きようが異なる校記が含まれることもある。上述のように各本に共通する校記は、全齋が頒布前に自家校勘を行ったものであろうが、それとは筆跡の異なり、かつ本ごとに内容を異にする校記は、例えば菅茶山のような、意見を求められた者が記したものであるかもしれない。茶山をはじめとする学者たちからのコメントを受けて、全齋は『韓非子翼蠹』の重訂版を構想していたのであろう。

またこの書簡にはあと二人の人物が登場する。ひとり蒲阪氏=保坂内藏之丞=松澤金三郎である。今一人は久太郎こと頼山陽である。頼山陽は、菅茶山の廉塾に出入りし、講義も行ってた。全齋も廉塾において面識を得ていたのであろう。³⁰

つぎに、蒲阪氏=保坂内藏之丞=松澤金三郎について検討する。³¹ この書簡中に『韓非子翼蠹』で蒲阪氏として引用していることがまずは述べられている。引用は少なからず存在するが、その一つを実例を示せば、「初見秦」篇の「齊南破荆、東破宋、西伏秦、北破燕、中使韓魏」に対する翼蠹注に「○蒲阪氏曰、荀子説閔王事曰、強南足以破楚乎重丘。～～」とある。これは徂徠の原本を蒲阪圓が「増」した、『増読韓非子』に「圓案（圓案ずるに）」と見える文章である。³² 亦この注釈内容は蒲坂自身の著作で『韓非子翼蠹』に遅れて成立した『定本韓非子纂聞』³³の同箇所「荀子説齊閔王事曰、強南足以破楚中足以拳宋、西足以黜秦、北足以敗燕。注、史記齊閔王二十三年、與秦敗楚乎重丘。～～」というのにほぼ対応する。³⁴ この書簡の内容を整理すると、

- ・木活字版印行の時には、面識がないまま蒲阪圓の説を引用していた
- ・蒲阪圓が全齋宅を訪ねてきて交流が始まった。
- ・蒲阪圓は遠慮なく韓非子翼蠹に批正を加えた
- ・恥ずかしく感じた（=蒲阪圓の指摘が妥当であり、受け入れた）

ということである。蒲阪圓が塗抹したという記事は、手元に『韓非子翼蠹』が備わっていたことを示している。いっぽう逆の立場で蒲阪圓の『定本韓非子纂聞』題言（文化六（1809）年六月 江都 松臯圓識）には太田全齋との交流が詳しく記されている。

定本韓非子纂聞題言

寛政丁巳之秋、予得謝病、屏居于青山之下。間曠少事専心斯業。顧諸子中、唯韓非書、尤切世情。能明是非。其文古峭簡深。固不易読也。～舊注猥陋、姑且勿論。～我先儒物

山諸子、頗發其幽旨微文、而未悉矣。予為發憤考校數本、因資諸家、纂輯異聞、採摭典故、預是有益、隨見旁羅。及辛酉冬、始得畢業、題「増読」。増物氏之読也。凡四卷。初嫌簡帙重大、倣經典釋文例、表拳正文一二字、而小書増読。不便誦読甚苦參索。既梓行世。不可悔也。後復編一書。具載本文。散入諸説于其下。傍施国読、以便童蒙。更名「定本韓非子」。恨家世貧、不能謀再挙以頌同好也。

文化戊辰之夏ト居于白渠之上、因得初訪福山藩太田全齋同好相投一而如故。會其韓子翊蠹活版成。見惠一部。予乃報以定本。既無副本以備遺忘、因為是挙、加以翊説。名曰定本韓非子纂聞。凡二十卷。殊以記所聞而已。如其序目凡例総評附録別為一卷。

寛政丁巳（9年1792）之秋、予謝病するを得て、青山之下に屏居す。間ま少事を曠しくして斯業に専心す。諸子中を顧るに、唯だ韓非の書のみ、尤も世情に切にして、能く是非を明かにす。其の文古峭簡深にして、固より読み易すからざるなり。～舊注は猥陋にして、姑且（しばらく）く論ずるなし。～我が先儒の物・山諸子、頗ぶる其の幽旨微文を發するも、而れども未だ悉ことごとからざるなり矣。予われ為に發憤して數本を考校し、因りて諸家に資り、異聞を纂輯し、典故を採摭し、預りて是に益あり、隨ひて見に旁羅ならんとす。辛酉（享和1年1801）の冬に及び、始めて業を畢ふるを得て、「増読」と題す。物氏の読を増せるなり。凡そ四卷。初め簡帙の重大なるを嫌ひ、『經典釋文』の例に倣ひて、正文の一二字を表拳し、而して小さく増読を書す。誦読に便ならず甚だ參索に苦む。既に世に梓行すれば、悔ゆ可からざるなり。後復た一書を編む。具に本文を載せ、諸説は其の下に散入し、傍に国読を施し、以つて童蒙に便ならしむ。更めて「定本韓非子」と名づく。家世よ貧にして、再び挙げて以つて同好に頌つを謀る能はざるを恨むなり。文化戊辰（5年1808）の夏、白渠³⁵の上にト居し、因りて初めて福山藩太田全齋を訪ふを得、同好相投じ、一面にして故の如し。會たま其の『韓子翊蠹』活版成り、見に一部を惠まる。予れ乃はち報ゆるに定本を以てせんとするに、既に副本の以つて遺忘に備ふる無ければ、因りて是の挙を為し、加ふるに翊説を以てす。名して『定本韓非子纂聞』と曰ふ。凡そ二十卷なり。殊に以つて聞く所を記すのみ。其の序目・凡例・総評・附録の如きは別に一卷を為す。

記事を時系列に並べれば以下のようなになる。

- 寛政9年1792：蒲阪圓、韓非子注釈開始。
- 享和1年1801：『増読韓非子』（A）完成。ただし閲読に不便。
- 日時不詳：「定本韓非子」（B）完成。ただし刊行せず。
- 文化5年1808：太田全齋『韓非子翼蠹』木活字本刊行
- 文化5年1808：太田全齋と意気投合。『韓非子翼蠹』を受く。

- 文化6年1809:「定本韓非子」を全齋に呈与しようとするが、すでに副本がないので、新たに全編を再構成し、さらに『韓非子翼蠹』の成果を取り入れて『定本韓非子纂聞』(C)を作成。全二十巻+別巻(序目・凡例・総評・附録を収録)

ちなみに『慶長以来諸家著述目録』は蒲阪圓の著作として

- a 韓非子纂聞 (10)、
- b 韓非子諸注提要 (2)、
- c 定本韓非子全書 (20)、
- d 増續(ママ)韓非子 (4)、
- e 復古韻圖例 (1)、
- f 修文齋十書 (10)

を載せる(凡例によれば、書名末尾の数字は巻数を基本とするが、冊数のこともあるという)。このうち誤字はあるが、『増續韓非子(4)』が、上の箇条の(A)にあたり、崇文叢書本の『定本韓非子纂聞』は全20巻で、cに当たることは確かであろう。この「題言」の記事によって、蒲阪圓と太田方の間で著作の交換と議論が行われていたことが確認できる。いっぽう太田全齋の方は、『増読韓非子』(A)もしくは『定本韓非子纂聞』(C)、もしくはその双方を手元に、あるいは蒲阪圓からの直接の批正を『韓非子翼蠹』の改訂に取り組んでいた。

以上の事情を考えると、『韓非子翼蠹』木活字本20部は、世上への公刊ではなく、また自らの研究を自ら記録する自家用副本としてだけでなく、改訂にあたってほかの研究者に批正を乞うための提示資料であったと考えるのが妥当であろう。

全齋は「韓非子翼蠹」跋文で、

積年の精力、殆んど將に烏有たらんとす焉。今茲に活版を購得し二十部を刷す。未定の述なれば。宜しく篋笥に緘すべきも、特だ一曙に池魚に離り、而して副本の舊業を修する無きを懼るるなり。因りて刷りて以つて自らに備ふ。豈に諸を世に公にせん哉。

と記す。ここには、副本製作に木活字が採用された理由は記されない。しかもこの20部という数字が、「武英殿聚袖珍版程式」の文章を流用したものであり、「少数印刷する」という意味を象徴的に表すのであって・・・実際に二十部印刷したという意味ではないのであるまいか」との指摘³⁶が、夙に土屋紀義氏によってなされている。全齋のこの文章は、大きな方向性は動かないとして、少なくとも部数については、いくらか幅を持った解釈せざるを得ないであろう。とすれば同様に、制作目的についても、研究成果の喪失に備える自家用副本製作であることに加えて、上記のような同学への供覧もその一端と考えてよいのではないかと。木活字本採用の時点ですでにこの供用という目的が意識されていたのか、それとも複数副本製作後に機を得て開始されたものか、そこは不明であるが、蒲阪圓ならびに菅茶山への批

評依頼が印刷完了後まもなくなくなされていることからすれば、木活字本の採用と20部余の副本制作の時点で構想にあったと考えたい。

ところで『韓非子翼蠹』木活字本を贈って、少なくとも菅茶山、蒲阪圓に意見を求めていたことは、先に確認したとおりである。さらに推測を述べれば、現在福山に所蔵される2本、すなわち義倉本、誠之館本は、全齋が出身の地福山へ贈った本の伝存である可能性もあり、早稲田大学本は蔵書印「福山江木氏之章」から、福山藩儒・江木鱈水(1810-1881)とかかわる可能性もある。亀田次郎は「太田全齋伝」のなかで、「阿部伯文庫(白河樂翁公旧蔵)」を目睹したと記すから、藩主阿部家および松平定信あたりにも呈上していた可能性がある。また鈔本ではあるが、『太田全齋書簡集』には、近藤重蔵への手紙が載せられて、両者の親密な交渉がうかがわれる上、内閣文庫所蔵鈔本には近藤重蔵(正斎)の蔵書印があり、『韓非子翼蠹』が正斎の目に触れていたことは確かであろう。さらに大阪大学本には「關藤文庫之印」があり、關藤藤陰(1807-1876)の流れに関わる可能性がある。これらは、批正を求めて全齋のもとから同学研究者のもとへ贈られたものなのではないだろうか。ほかに、林述齋、池田(松平)冠山、北条霞亭、松崎慊堂らとの交流も、書簡集からうかがえる。

IV. 豊橋図書館所蔵簡齋文庫本の紹介

前章で、『韓非子翼蠹』残存本の総体を検討したが、本章では豊橋図書館簡齋文庫本について詳細な検討を行う。

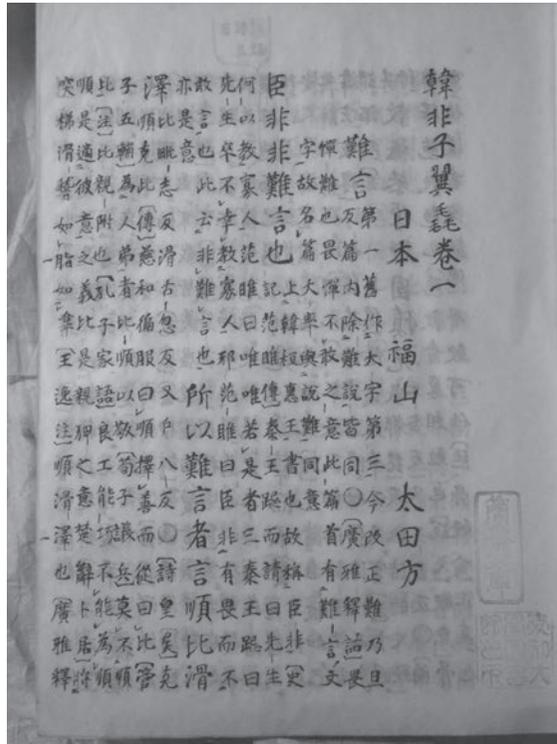
1. 書誌データ

この本のデータを、図書目録風に記載すれば以下ようになる。

- 韓非子翼蠹二十卷 日本 太田方 撰 大正四年写抄跋 鈔本
- 愛知大学豊橋図書館簡齋文庫所蔵(整理番号: 簡子 81)
- 無表紙、無包面。無帙。毎半葉10行、行18字。小字双行。紙縫り2穴簡易綴じ8冊。
「簡齋文庫」「愛知大学図書館印」朱文方印
- 内題:「韓非子翼蠹卷幾 日本 福山 太田方」など。
- 上部欄外に書入れあり。

木活字本との相違を確認しておこう。

構成: 木活字本では本文の前に「卷首」が置かれ、「韓非子翼蠹序(天明癸卯五月 福山太田方撰)」「韓非子翼蠹目録」「史記韓非伝」「韓非子付録翼蠹(初見秦、存韓)」が置かれるが、簡齋文庫本では、「韓非子翼蠹序(天明癸卯五月 福山太田方撰)」「韓非子翼蠹目録」「史記韓非伝」はあるものの、「韓非子付録翼蠹(初見秦、存韓)」は無い。



簡齋文庫鈔本卷一卷頭

簡齋文庫本の祖本であると考えられる京都大学本には、巻首として、「韓非子付録翼龜（初見秦、存韓）」が別冊で付されている。簡齋文庫本「韓非子翼龜目録」にも第一巻の前に「韓非子付録翼龜（初見秦、存韓）」が存在すべく記されており、京都大学本からの写鈔の流れの中で、脱落したかと思われる。

行格：木活字本が毎半葉 9 行 20 字であるのに対し、簡齋文庫本は毎半葉 10 行、行 18 字。小字双行。木活字本は、活字本の常として小字双行も文字の高さは大字と同じであり、簡齋文庫本も同じ。ちなみに京都大学本は、木活字本と同じ 9 行 20 字である。

版式：木活字本は四周単辺黒魚尾の匡郭・罫線を持つ。なお版心には「巻幾」、葉数、下部表に「全齋活版」の文字があるが、簡齋文庫本は、匡郭・罫線無く、漢数字で巻数、葉数を記すのみ。

記号：木活字本では小字双行部の区切りに小字一文字分の「○」印を使うのみであるが、簡齋文庫本はそれに加えて典故提示のための書名などに「[]」を使用する。この括弧は、字間に挿入され、文字スペースを侵さない。木活字本には返り点送り仮名は一切付されないが、簡齋文庫本では、全編に返り点、一部に送り仮名が付される。その点は京

都大学本と同じである。

装丁：木活字本は、凹凸模様の入った青緑色厚紙を用いる和刻本に常見の装丁であるが、簡齋文庫本は、紙縫り2穴簡易綴じで無表紙。

用紙：景印本で見る限り、木活字本は和刻本に常見の和紙のようであるが、簡齋文庫本は極めて薄い和紙で、裏映りがはなはだしい。

印記：木活字本は、本ごとに印記を持つものもあるが、簡齋文庫本は「簡齋文庫」「愛知大学図書館印」のみで、愛知大学収納以前の所蔵者は明らかにできない。

2. 永山近彰の「書後」

簡齋文庫本の位置づけを解明するうえで、全巻末に付された永山近彰の「書増訂韓非子翼龜後」は欠かせないデータであるので、紹介しておく。

書増訂韓非子翼龜後

右韓非子翼龜二十卷、借京都書估山田茂助藏本。属小澤順夫助等、鈔之以収尊經閣。順夫起筆大正二年八月、畢翌年十一月。是書全齋畢生精力所注、而此本係暮年增訂。比之刊本、頗有異同、可貴重也。聞山田本鈔京都大學教授狩野直喜藏本。而狩野本初実為孤本者矣。

大正四年王正 永山近彰識

「増訂韓非子翼龜」の後に書す

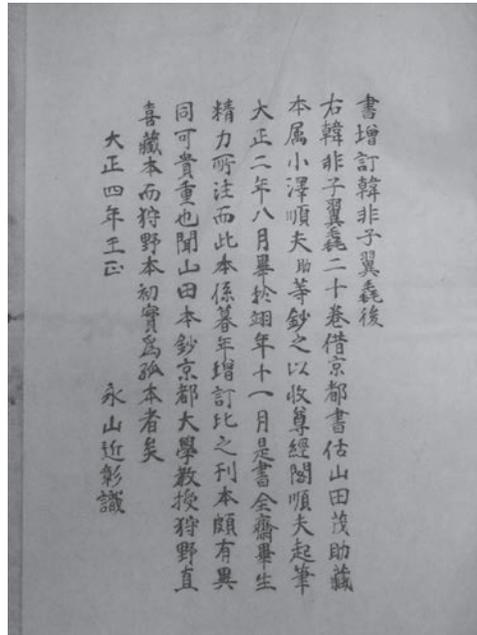
右「韓非子翼龜二十卷」、京都の書估・山田茂助³⁷藏本を借り、小澤順夫（助）³⁸等に属して、之を鈔して以つて尊經閣に収む。順夫の筆を起せるは大正二年八月にして、畢ふるは翌年十一月なり。是の書は全齋畢生の精力の注する所にして、而して此の本は暮年の増訂に係る。之を刊本に比すれば、頗る異同有り、貴重す可きなり。聞くならく山田本は京都大學教授狩野直喜³⁹藏本を鈔せりと。而して狩野本は初実に孤本なる者なり矣。

大正四年王正 永山近彰⁴⁰識

要点をまとめれば以下のようになる。

- この本は全齋が刊本刊行後継続研鑽した成果である
- 祖本は狩野直喜藏本である
- 狩野本の写しが山田茂助藏本である
- 山田本を大正年間に写して尊經閣に収めた

このうち、狩野本が現京都大学本に当たることは現本によって確認した。小沢筆写本が現尊經閣本に当たるかもしれないが、遺憾ながらこちらは確認できていない。またこの「書後」



簡齋文庫鈔本末尾附録「書増訂韓非子翼蟲後」

では、現簡齋文庫本自体の筆鈔関係が明らかでないのだが、尊經閣に収めたものの副本ということであろうか。簡齋文庫本の欄外書き込みには、京都大学本からの筆鈔に当たっての書き誤りの訂正とともに、京都大学本の文字への案語も間間見られる。いずれにしても簡齋文庫本は、狩野本=京都大学本の筆写を基礎として、それにいくらかの案語を加えたものである。

京都大学本には簡齋文庫本に無い「初見奏」「存韓」の2篇が巻首として付されている。また紙質も筆鈔も、ほぼ精鈔本といえるもので、現存最善本であり、簡齋文庫本は、それに次ぐ位置にある。

3. 簡齋文庫本の位置づけと課題

校正並びに永山の記事から、京都大学本ならびに簡齋文庫本『韓非子翼蟲』が、木活字本刊行以後の継続編集の中の本であることが明らかになった。しかしこちらも、『近代著述目録』などに記される「重訂」26巻完成稿でないことは以下の点から明らかである。

- ・タイトルが「重訂」の無いままである
- ・版面の中には出典表記、年号表記などの部分に空格が多くみられる
- ・著者の表記が、「太田方」「太田方稿」「太田方述」など不統一である
- ・底本、引用書などの研究上の基礎データが記されていない

・巻数が20巻立であり、『慶長以来諸家著述目録』や『近代著述目録 後編』が『重訂韓非子翼叢』の巻数として記す26巻でない

すなわち、京都大学本ならびに簡齋文庫本は、木活字本刊行後継続していた『韓非子翼叢』改定作業の未完成稿本の状態のものと考えてるのが最も適切であろう。彼が菅茶山への手紙の中で言っている通り「闔棺までは改候心得ニ御座候」(生存中ずっと改訂を続けてゆくつもり)なのであれば、果たして彼自身が最終完成稿を作成したかどうか疑わしいが、少なくとも26巻本『重訂韓非子翼叢』は一応完成していたのであろう。発見が期待される。

V. 近世における著述・書籍の製作について

最後に、近世における著述・書籍の製作と、その視点から太田全齋の『韓非子翼叢』を見てみよう。

1. 鈔本時代の著述

東洋では北宋時代以降、西洋ではグーテンベルクの活版印刷以後、書籍に関して「版」という考えが普遍化した。「鈔本時代」に対する「刊本時代」の到来である。そこでは、書籍の一応の完成形が提示され、固定される。この状況は少なくとも西暦2000年ころまで、あるいは現在まで続いている。「版」の形で紙面が固定され、公刊されると、書籍は著者の手を離れて独り歩きを始める。この状況下では、鈔本は刊本完成以前の準備段階であるとおおむねみなされ、刊本よりも劣位に置かれる。しかし鈔本時代には、完成最終版という考えがどれほど通用するものであったろうか。『韓非子翼叢』公刊の経緯は、この問題を考えるのに非常に示唆的である。

全齋は『韓非子』の注釈作業を蓋棺まで行うと宣言している。すなわち生存中に注釈作業を終了させ、最終版を刊行することは目指さないかの如くである。木活字版も、世上への完全公開を目的とするものではなく、同学研究者に意見を求めるための手段であったと思われる。永山近彰の簡齋文庫本への「書後」によれば、山田本を筆写するのに小沢順夫は大正2年8月から翌年11月までかかったという。実に15か月である。跋文に従って、もし20部を作成しようとするれば、このペースでは25年の歳月を必要とする。これでは同学研究者の意見を尋ねる手順にならない。また全齋は木活字を購入して使用したのだが、木活字印刷に必要な手間と時間については、活字譲り元の吉田篁墩の作業記録が残っている。吉田篁墩は『墨子』4冊30部を木活字で印刷するのに寛政8年3月から寛政10年7月までかかったという。そして篁墩はこの年の9月に没する。⁴¹ 木活字による印刷の部数は、20部から30部ほどであったのだろう。⁴² またこの『墨子』印刷の事例を見て、全齋は『韓非子翼叢』の木

活字印刷に目算を立てたのではないだろうか。

2. 同学批正を活かした研究手法の新機軸とその齟齬

全齋は、木活字印刷という手法によって8年で20部程を得た。それを同学の手元に届けることで、ようやく著作改訂のためのデータやアドバイスを獲得できたのである。このような研究・著述手法、すなわち研究の途中経過を少数数の試行版として同学に公開し、そこでの批評を得てより良い著述を作成するという手法は、完全な鈔本時代には無いものであり、学術著作における新機軸であるといえる。同学の意見を募るとしても、底本が固定していなければ情報のやり取りに齟齬が生じる。仮のものにせよ版面が固定されていれば、第何巻第何葉第何行第何字目のという指定が可能になり、フィードバックも書き入れた『韓非子翼蠹』全部を送り返す必要もない。そして意見を聞くべき同学は、先ず30人を出ないであろう。このような研究手法にとって、木活字版はふさわしい手段であった。鈔本に比べると、時間短縮、底本固定の点でまさっており、整版に較べるとき経費の点で優っている。⁴³ 木活字印刷という全齋の試みは、同学の批正を乞うという研究手法を構想して初めて、意義を持つものであった。従来の書誌学的解説は、木活字印刷の稀覯性を論じるに急で、それが求められる情況の分析に、過ぎて疎かたつと感ぜられる。先に見た菅茶山への執拗なまでの批正懇願は、この著述手法の根幹にかかわるが故であろう。『韓非子翼蠹』木活字版の同学への配布は、著述完成記念の贈呈などではない。しかしその意図を、木活字本を受け取った内、果たして幾人が理解したであろうか。僅かに蒲阪圓のみは間違いなく全齋の意を酌んで反応したかと推測される。「遠慮なく翼蠹ヲ塗抹シ」、彼自身も自らの著作を全齋に届けるべく作をしているからである。

ところで全齋の側にも目算に誤りがあったように思われる。それは、未完成本を刊行したことで「全齋の韓非子註釈」は完成したものとみなされ、改訂版への注目が弱まってしまったように見えるからである。しかも木活字印刷という異例の手法を用いたことは、この趨勢に拍車をかけてしまった。初稿本たる木活字本およびその転写本が少なからず残存する中で、『重訂韓非子翼蠹』は、名が残るのみで実本が現時点では確認できていない。漢文大系本の校訂者も「後年又更二重訂セルモノアリ」と記すのみで、入手を試みた形跡がない。太田全齋の『韓非子翼蠹』については、蒲阪圓との交流が両者の著書中に見えるのをはじめ、全齋書簡集や菅茶山の日記なども合わせて、いくらか当時の研究推進状況を知ることができた。ほかに松崎謙堂、松平（池田）冠山らとの交流も確認できる。ここに描出したような研究手法が当時どれほど異例であったのか、あるいは一般的であったのか、探求したく思うが、『韓非子翼蠹』のありさまは、幸いにもその一助となろう。

また最後にもう一点注意しなければならないのは、本書を扱う際に、木活字本という特殊性・稀覯性および刊行の辛苦にばかり目が行って、内容の検討が十分になされてこなかった点である。典故・用例指摘、歴史事実確認などの点でこの書が、先行する『韓非子』諸注釈に勝るものであることは間違いないが、はたして江戸漢学の成果として最高のものであるかどうかは検討の必要があろう。長澤規矩也は、依田利用の『韓非子校注』が最も優れると繰り返し説く。⁴⁴ 注釈内容の公正な再評価があらためてなされなければならない。⁴⁵

VI. 結論

本稿によって以下の3点を示し得たと信じる。

- 簡齋文庫本は、木活字本刊行後も継続した研究の成果を取り込んだもので、26巻本「重訂韓非子翼蠹」が見出されない現時点で、京都大学本に次ぐ善本である。
- 『韓非子翼蠹』木活字本の作成は、同学から批正を得るための最適の手段であり、いたずらな玩物趣味や、単なる経済的事由によるものではない。太田全齋の『韓非子翼蠹』に関わる功績の一つは、稿本を同学の閲覧に供し、フィードバックを得てより良い改訂本を作成するという学術手法の創出にある。
- 刊本が著述の最終形態であるという近代以後の著述概念は、相対的なものである。この事実は学術史あるいは著述史としてさらに探求し、鈔本時代に成立した多くの「書」の考察に応用されなければならない。

なお電子データ、リポジトリなどの普及によって大いに研究に便宜を得たが、悪疫蔓延のため、各地の原本を実見することができなかった。追って確認を進めたい。

書景の掲載を許下された愛知大学豊橋図書館ならびに雄松堂書店に深甚の謝意を表す。

VII. 関係資料

1. 太田全齋関係資料

- 満田新造「漢呉音図の解剖的批判」（『中国音韻史論考』所収）、
- 亀田次郎「太田全齋伝」国学院雑誌 11 卷 2 明治 38 年
- 亀田次郎「太田全齋伝補遺」国学院雑誌 11 卷 3 明治 38 年
- 亀田次郎「太田全齋伝続補遺」国学院雑誌 17 卷 6 明治 44 年
- 福田禄太郎「太田全齋伝」備後史談 5 卷 2-4 昭和 4 年
- 本城黄「太田全齋伝に就きて」国学院雑誌 11 卷 8 明治 38 年
- 妹尾啓司「太田全齋」芸備地方史研究 56-57 昭和 40 年

- ・朴堂「太田全齋与菅茶山尺牘」斯民 9 卷 1 昭和 2 年
- ・岡井慎吾「字音研究史上の全齋翁の位置」（『漢吳音図』所収）
- ・浜野知三郎『太田全齋書簡集』（昭和 8 年文祥堂書店。国立国会図書館デジタルアーカイブで公開）
- ・浜野知三郎「太田全齋先生年譜」（『音図口義／全齋読例』大正 4 年浜野知三郎編輯兼校訂、六合館発行に増載。「太田全齋先生著忠孝圖」「太田全齋先生書翰（天秉造氏所蔵）」「韓非子翼蠹跋（福山義倉図書館所蔵）自筆書入れあり」画像を掲載）
- ・富士川英郎『菅茶山』（1990 年福武書店）

2. 韓非子翼蠹關係資料

- ・大沼晴暉「Treasures 秘蔵（113）」三田評論 995 1997-10 慶応義塾大学三田メディアセンター（未見）
- ・河本一夫「韓非子翼蠹解題」汗青叢書第 1 編 1938 年謄写版（未見）
- ・住田秀「韓非子翼蠹について」（義倉略史抄）義倉女学園 1961（未見）
- ・住田秀「韓非子翼蠹について」義倉 1973（未見）
- ・潘惠婷「江戸時代日本《韓非子》學研究—以古文辭學派、折衷學派、考證學派為中心」中国語言及文學課程哲學博士論文 香港中文大學 2018 年 2 月
- ・星川周太郎「韓非子翼蠹」（『切腹三万両』昭和 17 年 4 月近代小説社刊所収。韓非子翼蠹の辛苦を小説化した読み物）
- ・覆印版 木活字本の複製 付：別冊川瀬一馬解説 帙入 和装本 原寸・原裝、特漉和紙使用オフセット刷、限定百部製作番号入 雄松堂書店 1972 年 なお原本の現在の所在は不明。
- ・町田三郎「邦人の『韓非子』注（『江戸の漢学者たち』所収）

注

- 1 愛知大学は 1948（昭和 23）5 月に元住友本社総理事・蔵相小倉正恒氏所蔵の漢籍等（簡齋文庫）約 30,000 冊を受贈している。（『愛知大学図書館概要』）
- 2 四部叢刊は「黄堯圃校宋鈔本」を採用する。別に「光緒元年（1875）浙江書局據吳氏影乾道本翻刻」との刊記を持つ本がある。吳氏本の底本は「（南宋）乾道改元（1165）中元日黄三八郎印」の刊記を持つ本であるという。
- 3 平石直昭著『荻生徂徠年譜考』（1984 年 東京・平凡社）によれば宝永 6 年（1709 年）成稿という。
- 4 『韓非子翼蠹』以外に、本文中での言及した蒲阪圓『増読韓非子』『定本韓非子纂聞』、他に依田利用『韓非子校注』、岡本保孝『韓非子疏證』、津田鳳卿『韓非子解詁』などがある。
- 5 吉田篁墩著『活版経籍考』、川瀬一馬『古活字版之研究』などを参照。

- 6 太田方が利用した既存活字の由来についての議論も吉田篁墩から引き継いだものであるとおおむね結論が出ている。
- 7 星川周太郎著『切腹三万両』（昭和17年東京・近代小説社刊）所収
- 8 「池魚」は城門の火災をいう。「相傳春秋 戦国時、宋国 池仲魚所居近城門、有一次城門起火、延及其家、仲魚燒死。一説、宋城門失火、爲了取池水灌救、池中汲乾、魚皆枯死。見藝文類聚九六魚、太平廣記四六六引風俗通。」
- 9 <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>
- 10 https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG
- 11 古典籍データベース（国書総目録）では、このほかに、内閣文庫／金沢大学の所蔵が表示されるが、両者ともオンライン検索では『韓非子翼龜』刊本の所蔵を確認できない。
また亀田次郎「太田全齋傳續補遺」（『国學院雑誌』第17巻第6号 明治44年）には「今日までに予の見聞する所によれば」として、
- ・阿部伯文庫（白河樂翁公旧蔵）
 - ・故島田博士文庫
 - ・岩崎男文庫
 - ・塩谷時敏氏文庫（故山井幹六氏旧蔵）
- を挙げる。岩崎男文庫→静嘉堂文庫の流伝は確実であろう。また塩谷時敏の息が塩谷温であり、その蔵書は天理図書館に節山文庫として納められているので、塩谷時敏氏文庫→天理図書館かもしれない。それ以外は現在の所在を確認できない。また『古板図録』（大正11年 印刷局内朝陽会 編、朝陽会刊）には、「福岡県 佐藤隣幸氏蔵」として『韓非子翼龜』巻末部分の書影が掲げられるが、現在の収蔵者は不明である。
- 12 漢文大系本巻末「韓非子翼龜解題補訂」
- 13 「韓非子翼龜跋文国訳嘗試」土屋紀義（『参考書誌研究』第36号）（1989年 国立国会図書館）によって、20部という表記が、武英殿袖珍版形式の言い回しを強く意識して記されたものであって、実数でない可能性が指摘された。大いに首肯されることである。
- 14 一般社団法人義倉は、太田全齋の故郷である広島県福山市にある民間慈善事業団体である。<https://giso.or.jp/>
- 15 浜野知三郎編、大正4年 東京・六合館刊
- 16 以下の紹介記事がある。「Treasures 秘蔵（113）」大沼晴暉三田評論995 1997-10。但し未見。
- 17 <https://dl.ndl.go.jp/infondlj/pid/2605238>
- 18 三村竹清の「収得書目」（日本書誌学大系23「三村竹清集十」）には「韓非子翼龜 一、二、三、四、二本欠、八冊、大正三年九月求 中略 此目録之分昭和四年文行ニ二万金ニ賣る 文行之を安田文庫ニ入れし也」とある。
- 19 印記のうち、「福山東田邊氏圖書記」は、あるいは広島県福山東高等学校（現福山誠之館高等学校）校長の田邊領一のものか。また、「福山江木氏之章」印記は、国立国会図書館所蔵『忠芬義芳詩卷上』（河原寛輯、土井有格校）、早稲田大学所蔵『南汎録』（用九）、『唐皮日休文藪』（国立故宫博物院所蔵）にも見える。この江木氏は、福山藩儒・江木鰐水につらなる者であろう。すなわち、この本は福山の人脈の中で元来伝承されたもののようなものである。
- 20 幕末の福山藩儒・關藤 藤陰（せきとう とういん）につらなるものか。
- 21 なお巻11の34葉裏の左欄外に「文政九年十二月五日」という小字書き込みがある。文政九年は西暦1826年、全齋の死に先立つこと4年である。この年号が何を意味するか明らかではないが、あるいは京都大学本が、このころに作成されたことを示すかもしれない。とすれば、死亡直前の4年間で、26巻本を完成させたことになる。
- 22 『国書総目録』によれば、東京大学は、上記の写鈔年代不明のものほかに享和元（1801）写六冊本の鈔本を有するはずであるが、現在の東京大学 OPAC では該当書が見いだせない。
- 23 <https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F1000000000000034787>

- 24 「参考書誌研究第 36 号」(1989 年 国立国会図書館) 所収。インターネットで公開。この論文では、数字が独り歩きしている感のある 20 部印刷という表記の考察など、極めて示唆に富む見識が提示されている。木活字本の一般的な印刷部数に関しては、福井保「木活字本の異版について」(『内閣文庫書誌の研究』日本書誌学大系 12) に具体例を以って記述されている。
- 25 中根肅治著 明治 27 年 八尾新助刊。のち近世文芸研究叢書所収。
- 26 原典は東条琴台の天保 13 年 (1842) 年原稿。正宗敦夫編纂校訂で日本古典全集に収められ、現在は日本人物情報体系や、国立国会図書館デジタルアーカイブでも閲覧可能。なお編纂校訂者の正宗敦夫が創立した正宗文庫は『韓非子翼龜』木活字本を所蔵する。
- 27 濱野知三郎著 昭和 8 年 東京・文祥堂。国会図書館蔵本がデジタルアーカイブで公開。
- 28 富士川英郎著『菅茶山』(1990 年 東京・福武書店) は、全齋と茶山の交流および江戸・福山往来の次第も考慮して、この書簡を文化七年に懸ける。
- 29 残念ながら菅茶山の所蔵に確証がある『韓非子翼龜』は現在確認できていない。先に残存本の項で記したように、福山には少なくとも『韓非子翼龜』木活字本が 2 本伝わっており、あるいはいずれかが茶山の旧蔵本かもしれない。
- 30 そのあたりの交友については、先出の富士川英郎著『菅茶山』に詳しい。同書には巻末に索引もあり極めて有用である。
- 31 以下、蒲阪圓と記す。須原屋刊文化六年版『武鑑』御膳奉行の項には松澤金三郎の名が見えない。
- 32 『増読韓非子』巻 1 第 3 葉オモテ第 1 行小字注
- 33 崇文叢書本がインターネットで公開されている。崇文叢書、第 2 輯之 1-9、37、45 <https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1243131>
- 34 ちなみに『韓非子纂聞』は「江都 松阜園纂聞」となっている。とすれば、蒲阪圓 = 保坂内蔵之丞 = 松澤金三郎 = 松阜園である。さらに「蒲阪青莊」という名も辞書の類では用いられる。また、「松平左京太夫様」とは、伊予松山藩主の松平家をいう。すなわち彼は、最初、伊予藩士であり後に幕府御家人となったのである。
- 35 現在の東京都文京区小日向付近の神田上水の白堀部分のことを言うか。全齋から菅茶山へ贈られた書簡では蒲阪圓について「今は水道町にて松沢金三郎〜」とある。
- 36 注 12 参照
- 37 詳細不明
- 38 詳細不明ながらも、加賀前田家の藩政史料の管理と整理に関わった小沢助左衛門かと思われる。「近代以降の石川県における史料蒐集の動向」堀井美里 (『金沢大学資料館紀要』第 5 号) 参照。
- 39 大正 4 年の時点で京都帝国大学教授。木活字本を有していた島田篁村の東京帝国大学文学部漢学科での受講生であり、漢文大系本を校訂した服部宇之吉とは義和団事件の際ともに在北京日本大使館に籠じた仲である。狩野直喜の蔵書は上述のように『君山先生蔵書目録』に著録され、現在、京都大学文学部図書室に収められている。
- 40 小沢助左衛門とともに加賀前田家の藩政史料の管理と整理に関わっていた。
- 41 『本の話』(三村清三郎著、昭和 5 年岡書院) 所収「佐坦の活字」
- 42 注 24 参照
- 43 印刷本のメディアとしての最大の特性が、産出部数ではなく定本確定にあることについては、「書物の文化史 メディアの変遷と知の枠組み」加藤・木島・山本編 (2018 年丸善出版) で論じた。
- 44 「韓非子校注の影印に際して」(『韓非子校注』解説 1980 年東京・汲古書院刊)。なお長澤は「韓非子校注は稀覯の書である。静嘉堂文庫で、その自筆本及びその転写本に接して以来、五十余年の各地訪書中、傳鈔本を見たことがない。」(『静嘉堂文庫漢籍分類目録』では『韓非子校註』の 12 冊セットと 11 冊セットの 2 種を著録) と記すが、尊經閣には「韓非子二〇卷/依田利用校注 写 一二冊」が著録されている。
- 45 『韓非子翼龜』をはじめとして、『韓非子校注』、『韓非子纂聞』、『韓非子解詁』などの江戸時代の『韓非子』注釈については、町田三郎「邦人の『韓非子』注」(『江戸の漢学者たち』) 所収) に注釈傾向の違い、流布の多寡などをはじめ、要を得た解説がある。